

白金

平成二十三年四月発行 第二号



題字：齋藤恭子。表紙の写真：白金蔭。

白金葭月例句会案内

・五月二十日(金) 12:00 ~ 15:00

兼題 鯉幟、麦秋含む五句

アビスタ第五学習室(我孫子駅より南(徒歩十分)

・六月十七日(金) 12:00 ~ 15:00

兼題 薫風、紫蘇、を含む五句

アビスタ第五学習室(我孫子駅より南(徒歩十分)

七月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第一和室)

兼題

兼題参考句 (5月20日分)

鯉幟

たたまれて布にもどりし鯉幟

鯉幟もう子を叱ることもなし

矢車や谷戸はみどりの朝風に

鯉幟重機一日地を均す

麦秋

ばんざいが漂っている麦の秋

喉仏のあたりが痒し麦の秋

児の本にふえし漢字や麦の秋

村中が眩しくなりぬ麦の秋

松本圭

的場秀恭

西島麦南

西藤昭

松本勇二

中村和弘

木下夕爾

長谷川嘉代子

月例句会報 (11 / 4 / 15) 投句12名

吉羽多美子

春暁の雨音兄のみまかりぬ
炊き出しのテントをゆする春疾風
パンジーの花壇に落とす耳飾り
地震の地に祈りとどけと花辛夷
暝りて点滴受くる春の雷

青木啓泰

春の雨そり歩いてそり濡れ
大ふぐり世の中捨てたものでない
気の毒な人もまじって沈丁花
パンジーを振向きもせぬ別れかな
いくつもの街が消え去り咲く辛夷

嘉悦羊三

春暁を余震に覚めぬ虚かな
春宵の恋文横丁無言酒
まほろばの丘の三色堇かな
大仏のうしろ瑞山鳥の恋
桜散る無碍の光を放ちつつ
パンジーや考える人の顔となる
春暁の鳩おどろかす余震かな

窪田空華

津波禍の鹹しおはゆき地に遅桜

原発禍冷たい春が嘔吐する
椿寿忌や茫洋として老大樹

春暁や竈の匂ひ寢床まで
新しき靴にて戻る花疲れ
パンジーの丘に椅子あり写真館
空からの辛夷吹雪よランドセル
居ずなりぬ猫待つてゐる日永かな

春暁の舞台はこゝと土手登る
側溝の液状化跡すみれ咲く
自転車の少年続く花の中
対岸の雲の裾わけ春暁す
節電の水枯れ池に河原鶉

地の震へいつの何時まで三色堇

朝東風や得手に帆をあげ宜候ようそうろう

海峡や蝶となりたる三色堇
春暁遠海鳴りにひた怯え
金太郎幟立て木の芽田楽かな

光成敏子

飯塚トシ子

飯田孝三

パンジーやわが血圧の高きこと

春暁の青き世界に包まるる
大津波卒入学を散り散りに

天災に気の鬱ふさぎ居る花明り

畦塗の乾きて地震のひび模様

震災の新聞もとぶ花吹雪
電波塔地軸に揺らぎ桜騒

災害の記事積む春を無為なにもせず

もの想ふ三色堇余震また
蛇口まで津波の及ぶ春暁

春暁の余震に起きてまたねむる

虹のとびゆく一点のひかりかな
春昼の犬黙々と通りけり
大利根の堤日の照る堇かな

倒れたる灯籠傍目に松芽摘む

春暁のラフタークレーン音立てて

黒田彰一

増田陽一

増田悦子

小山陽也

光成高志

ペンジーの自棄に咲き居るロータリー
 入学式 君が代歌 ふ中にある
 空 掴むごとく御苑の大桜
 昼の月 あげて岬の花の雲

選句結果(数字は入選数)

- 3 震災の新聞もとぶ花吹雪
- 3 空 掴むごとく御苑の大桜
- 3 春暁や竈の匂ひ寢床まで
- 3 ペンジーやわが血圧の高きこと
- 4 津波禍の 鹹き地に遅桜
- 3 新しき靴にて戻る花疲れ
- 2 春暁を余震に覚めぬ虚かな
- 2 春暁の余震に起きてまたねむる
- 2 電波塔地軸に揺らぎ桜騒
- 2 春の雨 そろり歩いてそろり濡れ
- 2 春宵の恋文横丁無言酒
- 2 災害の記事積む春を無為
- 2 春暁の青き世界に包まらるる
- 2 春暁の雨音兄のみまかりぬ

陽一 高志 敏子 彰一 空華 敏子 羊三 悦子 陽一 啓泰 羊三 陽一 多美子

- 2 昼の月あげて岬の花の雲
- 2 春暁の鳩おどろかす余震かな
- 1 虹のとびゆく一点のひかりかな
- 1 まほろばの丘の三色堇かな
- 1 炊き出しのテントをゆする春疾風
- 1 入学式君が代歌ふ中にある
- 1 春暁の舞台はごとく土手登る
- 1 地の震へいつの何時まで三色堇
- 1 春暁のラフタークレーン音立てて
- 1 ペンジーの丘に椅子あり写真館
- 1 側溝の液状化跡すみれ咲く
- 1 犬ふぐり世の中捨てたものでない
- 1 朝東風や得手に帆をあげ 宜候
- 1 空からの辛夷吹雪よランドセル
- 1 いくつもの街が消え去り咲く辛夷
- 1 海峡や蝶となりたる三色堇
- 1 大津波卒入学を散り散りに
- 1 自転車の少年続く花の中
- 1 天災に気の鬱ぎ居る花明り
- 1 大仏のうしろ瑞山鳥の恋
- 1 春暁遠海鳴りにひた怯え

高志 空華 悦子 羊三 多美子 高志 トシ子 孝三 高志 敏子 トシ子 啓泰 孝三 敏子 啓泰 孝三 彰一 トシ子 彰一 羊三 孝三

1 春昼の大黙々と通りけり

1 倒れたる灯籠傍目に松芽摘む

1 パンジーの花壇に落とす耳飾り

1 気の毒な人もまじつて沈丁花

1 原発禍冷たい春が嘔吐する

1 対岸の雲の裾わけ春暁す

1 眠りて点滴受くる春の雷

1 金太郎幟立て木の芽田楽かな

1 居ずなりぬ猫待つてゐる日永かな

1 もの想ふ三色菫余震また

1 パンジーを振向きもせぬ別れかな

1 大利根の堤日の照る菫かな

1 椿寿忌や茫洋として老大樹

1 畦塗の乾きて地震のひび模様

1 桜散る無碍の光を放ちつつ

1 節電の水枯れ池に河原鶉

1 地震の地に祈りとどけと花辛夷

1 蛇口まで津波の及ぶ春暁

1 パンジーや考える人の顔となる

悦子

陽也

多美子

啓泰

空華

トシ子

多美子

孝三

敏子

陽一

啓泰

悦子

空華

彰一

羊三

トシ子

多美子

陽一

空華

一句鑑賞

新しき靴にて戻る花疲れ

飯田孝三

敏子

新しい靴を履いて行つたせいか、今日の花見はいやに疲れた。(家に帰ると)着替へはおろか、動くのも億劫。そんな花疲れの氣息が伝わり、花埃、人埃で曇つた新靴の表面が目に見え、「新しき」が眼目。春は日も草木も甦る時、新生の氣が通い、一方、「戻る」が、帰りの足どりを伝え、帰宅のとたん、どつと身にかぶさる「花疲れ」を身籠る。一句の響き、弾み(上)抑え(中)、弛み(下)は、花季の氣韻そのものを思わせる。『にて』がうまい。理由・原因・場所・状態・手段・材料等を表し、ほぼ『で』に当るが、ときに断りすぎて出づ張る。句歌では、往々そこで凭れるが、掲句は軽く抑え、すつと抜ける阿吽いと妙。「唐崎の松は花より朧にて」(芭蕉)。

犬ふぐり世の中捨てたものでない

光成高志

啓泰

早春、他の草がまだ出ぬ頃から、地にびつしりと萌え出でて可憐な花を咲かせる犬ふぐり。人の世は、悪いやつもあるけれど、殆どがよい人である。互いに助け合う情もある。人間、百パーセント幸福、百パーセント不幸という事はない。転んでも只では起きぬ強さを人は持っているものだ。世の中

捨てたものでない。地を見なさい。犬ふぐりが咲いているじやあないですか。犬ふぐりという名を持った早春花の本意の一つに格上げしたい。

春暁の鳩おどろかす余震かな

黒田彰一
空華

東の空がまだ明けぬ、紫色の世界に突如大地を揺るがす地震。さすがの鳩も飛び立ちたものの方向感覚を失い、近場を右往左往するばかり。羽音だけが騒がしい。今の民主党は、鳩、否、管ばかりが騒がしい。

パンジーの花壇に落とす耳飾り

光成敏子
多美子

パンジーで埋め尽くされた花壇に計らずも、イヤリングを落としてしまった。これはそう簡単に見つかるものではない。耳の形のパンジーだもの。花の妖精たちが競って自分の耳に着けたがつているに違いないから。

ハガキ句と鑑賞

ハガキ句第二報 (05/2/21)

音立てぬ翅音つじの返り花
背中蹴とばしてもみる大冬瓜
ふる里の白梅観ながら栗ぜんざい
三寒の四温のぬくもり手のひらに

孝三
〃
恭子
康子

婦恋や山の湯深き雪囲い
冷え切つて筑波二峯の相寄らず
日本橋亭に鹿の子の落語を聞く
川風や魚氷に上る日本橋
切干の網に張り付く固さかな
百千鳥森の木馬はひとりぼち
菜の花へ影つけてゆく歩みかな

征司
妙子
高志
〃
敏子
〃

ハガキ句管見 (第二報)

飯田孝三

切干の網に張り付く固さかな

高志

切干切は主に年寄りの仕事だった。大きな鉋様の削器で大根を細かく切る。子供の頃日向の筵の上でよく手伝わされた。切り出したあと、天日に乾かす。何日かすると、乾いて干し網の網目に張り付く。結句「固さかな」が見事。ぴんと張りつめた寒気をひたと言いとめる。写生に徹しつ写生を超える。凜冽の句である。又々、新境地を開いた句。作者の代表句の一つだろう。

菜の花へ影つけてゆく歩みかな

敏子

「・へ影つけてゆく」がいい。発見である。春の思いを伝え、類想を見ない。そこが句のポイント。してみると、末尾「歩みかな」がどうだろう。「歩み」は「影つけてゆく」に尽されている。作者の視点が「歩み」すなわち足許に収斂する。菜

の花の上をうつる影に目を遣りながら、一方、足許に落とすわけだ。焦点が分散し影の印象が薄れないか。かつ、「かな」の詠嘆で放散する。菜の花のゆく影をずっと追いたい。ぼくの好きな記憶の御旧作「日傘の影の中ゆく歩幅かな」の場合、全て日傘の中にあり、思いは「歩幅」に結晶する。

百千鳥森の木馬はひとりぼち

敏子

賑やかな囁りにいる一騎の木馬が印象的である。一騎でなくてもよい。ただ、「ひとりぼち」は情緒すぎないか。

川風や魚氷に上る日本橋

高志

橋上を高速道路が駆ける日本橋にそういう昔があったわけですね。今昔の感に耐えません。

季語探訪（一）

花疲れ・花見の疲れ、人手や陽気のせいもある、と歳時記にはあるが、人混みを出歩けば、花見ならずとも疲れる。陽気ゆえの気解さも同じ、花見に限らない。花見ならではの氣息に触れる何かがなければ、季題の本意を離れるだろう。現代俳句では左の青歌の句がいい。

マハ椅子に凭るがごとく花疲

阿波野青畝

（以上飯田孝三記）

マハとはマハーカーシャパの略。釈迦の十大弟子の一。頭陀第一と称せられた。釈尊の滅後教団の統率者となり、王舎城の第一回仏典結集の主任となつてこれを大成。特に禅宗

では尊信される。マハーカーシャパが椅子に凭れて、やれやれ、と一息ついているごとく私は疲れました。今日の花見は楽しかった花見の終焉を寿いでいる。花疲れとはそういう疲れです。

お便り広場（到着順、敬称略）

薊主宰の森下流子さんからお祝い電話がありました。薊を創刊して七、八年になる。三五人で出発して、今は一二人になった。口伝えにて増えて行つた。続けていけば貴方もそうなりますよと言われた。流子さんは、卒寿迎えられた福井市在住の誓子先生に似た天狼の先輩。

受贈誌（四月号）

届かざる背中が痒し養花天（彩）	平野ひろし
百千鳥本読みおれば耳痒し（一）	〃
鹿鳴館時代の海老茶花道草（二）	〃
濃あじさる字の要に水の神（俳句四季四月号）	〃
幣を食む鈴鹿雪の奥の院（彩）	平山三郎
満開の花より白き天守閣（薊57号）	森下流子
涅槃図に吾入る余白まだありぬ（薊56号）	〃
縫い針を箱にしまつて暴風圏（亜通巻258号）	青木啓泰
娘なき女房を見ている十三夜（一）	〃
蛸生えて蟻がおろおろしてゐたる（句と批評No5）	菅野孝夫

蒲焼の鰻の端の少し白

(〃)

〃

「萱」吟行句会（4／8新宿御苑）

幼な子のころがつてくる春の芝

良子

花吹雪道おのずから泉水へ

一艸人

歩き歩いて春塵の靴となり

高志

草萌に坐る男と猫二匹

敏子

空洞に薬宿す古木かな

トシ子

原稿募集

・句会報の中から二句選び鑑賞文を書き発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。鑑賞文は二百字を目途にお書きください。・俳句作品は十句、評論、エッセイなどは1ページ(千字)以内、連載できます。

我孫子日記

4／6入学式。4／8萱吟行句会。4／13 SOA。4／16 SOAオープンングセレモニー&チャリティコンサート4／18 湯河原・来宮4／21 久寺家中。4／22 菜園隣ヒサドーさんに決まる。合間水泳、播種箱水遣り、苗移植など菜園事。

編集後記

白金霞創刊句会をようやく持つことが出来た。手賀沼畔の図書館にて12名の投句55句を八人にて選句。手賀沼を望む洪積台地は杉村楚人冠の湖畔吟社の発祥地であり、又大正の文人村でもあった地。この伝統を継いで行きま

白金霞 第二号 平成二十三年四月発行

編集・発行人 光成高志

発行所〒二七〇・一一九我孫子市南新木二十四十七

電話・FAX 〇四・七一八七・一〇六八